

『今月の天候と農作業』

通巻第5694号
12月号
令和6年12月5日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、寒気の影響を受けにくいため高いでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みですが、1週目の後半頃に寒気の影響を受けるでしょう。

期間のはじめに低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は多いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	10	80
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率80%です。降水量は、多い確率50%です。

<1週目の予報> 12月7(土)～ 12月13日(金)

期間のはじめは雨の日がありますが、その後は高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。

<2週目の予報> 12月14(土)～ 12月20日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 12月21日(土)～ 1月3日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆水稲

1 ほ場の準備

土づくりは安定した収量・品質の確保のためには不可欠です。

堆肥を使用する場合には地力や前作を考慮しながら、牛ふん堆肥は、10a当たり1tを目安に投入します。ケイ酸質資材は稲の茎葉を硬くし、倒伏防止や耐病性、品質・食味の向上に効果があるため、土壌診断の診断結果や地区基準に基づき施用しましょう。

ロータリー耕だけでは作土が浅くなるため、プラウによる深耕を行い、根域を15cm以上確保しましょう。

また、スクミリングガイ（ジャンボタニシ）の対策では、厳寒期の耕うんが効果的です。発生ほ場では、トラクターの走行速度を遅くし、ロータリーの回転数を上げると、殺貝効果が高まります。

2 種子の準備

自家採種の種子は、異品種混入やイネシンガレセンチュウ、ばか苗病等の発生の恐れがあるため、採種ほで生産された種子を利用しましょう。

複数の品種を扱う際は、異品種混入に注意し、資材の清掃や品種ラベルの確認等を行いましょう。

◆麦類

1 播種・排水対策

平坦地の播種適期は、12月上旬頃までです。播種が遅れる場合は、播種量を増やし、莖数を確保します。発芽後の湿害防止のため、播種前に作溝して排水対策を行いましょう。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆施設野菜全般

気温の低下に伴い、暖房経費が増加します。「小さな対策の積み重ね」が大きな経費削減につながるため、できることから保温対策に取り組みましょう。

◆きゅうり

促成つる下ろし栽培では着果が安定してきたら、午前中の湿度を確保するため、内張りビニルの開閉により湿度調節を行います。開花位置が上昇してきたら、夜温設定を上げて、幼果の摘果を行います。定期的に追肥を行い、草勢維持に努めます。

◆ピーマン

促成栽培は収穫や側枝の整枝を行います。具体的には、低位節から発生している徒長枝を根元から除去し、第3～4分枝の懐枝は、収穫が終わったら1節を残して切り戻します。また、第1分枝より下の本葉はうどんこ病やコナジラミ類の発生源となるため、随時除去します。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトともに収穫期です。気温が低下し、日照時間が短くなる中で着果負担が増加するため、果実肥大の促進と草勢維持のため、温度、かん水量、追肥量を調整します。草勢低下が見られる場合は摘花（果）を行います。また、天候が悪くなると裂果の発生が増加するため、施設内の湿度を上げすぎないように注意が必要です。

◆いちご

頂花房の収穫と第1腋花房（2番果）の肥大期となります。着果負担も大きくなり、草勢が低下すると第2次腋花房（3番果）以降の収量、品質に影響するため、裾玉の摘果や定期的に追肥を行います。また、低温期は吸水量・吸肥量ともに低下するため、電照管理や定期的な葉面散布を行い、草勢維持に努めます。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

収穫が終了したほ場では、次作に向けた土づくりを行いましょう。特に、排水性の悪いほ場では、排水溝との接続状況を確認し、表面排水ができるようには場を整備しましょう。

◆にら

促成栽培の収穫期です。無加温栽培では、多湿による白斑葉枯病の発生や低温による葉先枯れ症が発生する場合があります。農薬による防除や保温をしましょう。

加温栽培では、加温機の設定温度は5℃が目安ですが、刈り取り後の3～4日間は10℃に設定することで、葉の展開が促進されます。

◆さといも

収穫が終了したほ場では、残さを片付けましょう。次作の種いもを栽培ほ場でそのまま保管する場合は、寒さでいもが腐敗する場合があります。マルチを除去し、土寄せや敷きわらをして、いもの腐敗を軽減しましょう。

◆ごぼう

トンネル栽培では、今月上旬までが播種期です。発芽の適温は20～25℃です。30℃以上では発芽率が低下するため、換気をしましょう。

◆にんじん

トンネル栽培では、今月上旬までが播種期です。発芽の揃いを向上させるために、トンネル内の温度を25～28℃で管理しましょう。30℃以上になる場合は換気をしましょう。出芽後、1月下旬の肥大期までは、同様に温度管理をしましょう。

◆かんしょ

育苗ハウスの準備期です。育苗ハウス内の残さを除去し、土壤消毒をしましょう。

(中村 剛)

果樹

1 常緑果樹

◆露地柑橘の病害虫防除

ハダニ類やカイガラムシ類の越冬虫数を減らすため、マシン油乳剤を散布します呼吸孔である気門を塞ぐことで殺虫させるため、枝や葉に十分な量を散布しましょう。なお、樹勢が弱い樹には冬の散布は避け、3月上旬頃の発芽前に散布します。

◆完熟きんかん

果実肥大が十分に確保されている園では、果実の着色を重視し、昼間の温度は15℃程度を目安に管理します。果実肥大促進のために秋季加温管理を実施している園地でも、12月中旬からは、徐々に温度を下げていきます。

着色後、成熟が進んでくると高湿度により、裂皮が発生しやすくなるため、早朝の換気に努め、ハウス内の湿度を低く維持しましょう。

◆マンゴー

夜間冷房を実施した園では出蕾や花穂の伸長が見られています。出蕾後、ハウス内の温度を急に上げると葉芽になりやすく、花が咲いた場合でも結果率が低くなります。花芽の発生状況を確認しながら徐々に温度を上げ、充実した花を確保します。

2 落葉果樹

◆基肥の施用

落葉果樹は、柑橘類などの常緑果樹と違い、根の活動が始まるのは2月上旬頃と早い傾向にあります。このため、ナシ、クリ、カキなどは年内に基肥を施用しておきます。ただし、発芽不良が多いナシ園では秋冬期に施肥を行わず、春肥で補うようにします。

◆クリ

収量を増やすためには、剪定が非常に重要です。隣の樹と枝が当たるようであれば、まず間伐や縮伐を行います。剪定は、弱小枝をすべて除去し、基部の太さが8mm以上、長さ50cm程度の充実した結果母枝を1㎡当たり5本程度になるように整理します。

3 果樹園共通

◆石灰の施用

土壌の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害し、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、酸性の場合は石灰質資材で調整しましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆電照ギク

「神馬」系統は10℃以下の低温に遭遇すると開花遅延を起こすおそれがあるため、消灯までは夜温を実測の温度で13℃（低温開花性系統は12℃）で管理します。なお、消灯前に低温に遭遇した場合は、消灯2週間前から夜温18℃（低温開花性系統は15℃）で予備加温を行います。

また、消灯後に四段サーモを用いた変夜温管理を行うと、開花が大幅に遅れることなく、暖房コストの削減が可能です。

◆スイートピー

気温の低下に伴って品質が安定し、出荷量が増加する時期です。つる下げ等の作業を早めに行い、適切な草勢を維持しましょう。

また、微生物農薬のダクト散布を継続的に行い、年明け以降の灰色かび病の発生リスクを軽減しましょう。

◆デルフィニウム・エラータム系

1番花収穫前から2番花の抽だいが始まっている株もあるため、出荷計画に合わせた温度管理が重要です。

1番花出荷終了後の夜温管理は、ロゼット回避型（1～2月出荷予定）では抽だいまで15℃、ロゼット打破型（3～4月出荷予定）では30～40日間低温処理してロゼットを打破した後、10～15℃で管理しましょう。

◆トルコギキョウ

発蕾から開花期に夜温を15℃に加温することで花シミの発生が減少し、品質並びに日持ちの向上にもつながります。換気等の除湿対策も併せて実施しましょう。

◆ラナンキュラス

ハウス内の温度が下がりすぎると生育の停滞につながるため、日中は15℃程度を目標に管理します。

また、1番花の収穫開始に伴い草勢が低下する場合があるため、硝酸態窒素主体の液肥を適宜施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を目指しましょう。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

鶏では12月2日に、県内で1例目の高病原性鳥インフルエンザが発生しました。今シーズンは全国的に発生が多く、感染リスクが非常に高い状態となっています。また、豚熱についても佐賀県において野生イノシシへの感染確認が続いています。

鳥インフルエンザの発生を防ぐために引き続き高いレベルの対策が求められています。野生鳥獣の侵入防止のために、防鳥ネットや防護柵に破れや隙間がないかなど点検を強化し、必要に応じ補修しましょう。

家畜伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底し、飼養衛生管理基準を遵守しましょう。

◆家畜

本格的に寒さが厳しくなり、朝晩の気温が急激に低下する時期です。幼畜は、特に温度変化に弱いため注意が必要です。適切な温度管理と換気を行いましょう。

子牛は、寒さに弱いため、牛体に風が直接当たらないようコンパネやシートで風を防止します。また、コルツヒーター等の保温器具を活用し、防寒対策を実施しましょう。

牛床において、子牛の腹部が濡れた状態では疾病を発症しやすくなるため、こまめに敷料を交換し、床は常に清潔で乾燥した状態にしておきましょう。

牛舎内の温度維持のため牛舎をカーテン等で閉め切りましょう。ただし、アンモニアガス等による呼吸器病の発生リスクが高まるため、こまめに換気しましょう。

◆飼料作物

極早生品種のイタリアンライグラスや晩夏播きのエンバクの年内収穫の時期です。適期収穫による良質粗飼料の確保に努めましょう。

(藤井 真理)

特用作物

◆茶

1 茶樹の凍害対策

気温の低下に伴い茶樹の耐凍性は徐々に高まりますが、急激な低温が予想される場合や、本年、中切り更新を行った茶園等では冬芽の凍害（芽つぶれ）や裂傷型凍害（幹割れ）が発生しやすくなります。

防霜ファンやスプリンクラーを利用して防寒対策を実施する場合は、実際の気温とセンサーの温度との誤差をチェックした上で、設定温度を0℃とし、冬芽の耐凍性獲得状況を確認しながら実施しましょう。

2 カンザワハダニ・チャトゲコナジラミの防除

一番茶の収量・品質への影響が大きいカンザワハダニは、越冬前後の防除により密度を下げるのが重要です。

防除の際には、事前に裾刈りを行い、地域の防除暦に従ってチャトゲコナジラミとの同時防除に努め、裾部や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら散布しましょう。

3 新・改植園の準備

茶園の有効土層は60cm程度といわれていますが、茶の根は1m以上伸びることもあるため、来年の春に新・改植を予定しているほ場では少なくとも60cm、可能であれば1m以上の深耕や天地返し等を行い、有効土層を確保しましょう。

また、土壌pHの矯正や堆肥の施用及び排水対策等も必ず実施しましょう。

（竹田 博文）

◆しいたけ

1 原木の玉切り

原木伐採後、40～60日程度の葉枯らし乾燥が済んだら玉切り作業を行います。玉切りの適期は、①伐採原木の元木口（直射日光の当たっていないもの）のひび割れが直径の1/2～2/3程度に達した頃②指の太さ程度の枝を丸めて、折れずに円になる頃とされています。また、作業性が良いように、1～1.2mを目安に切り揃えます。

2 植菌

玉切り後は、直射日光に当てず、害菌や害虫の侵入防止のため早めに植菌を行います。特にドリルで穴を開けた場合は乾燥を防ぐため、その日のうちに植菌します。

種菌は、栽培条件や目的に合った品種を選定します。

植菌（種駒）数は、原木末口直径（cm）の2倍程度の数とし、植菌間隔は縦に長く、横に短くし、千鳥状又はらせん状に行います。樹皮に傷がある場合や枝の切り口がある場合は周囲に余分に植菌して、害菌の侵入を防ぎます。大径木、老齢木は樹皮が厚いので、種菌が材部に届くようやや深めに接種しましょう。

（田畑 美香）

関連情報

◆農作業安全

先月は農作業死亡事故が多発しました。農作業事故は、機械作業時の操作ミスに加え、無理なスケジュールによる疲れや焦りなどが重なると発生リスクが高まります。

冬にかけて日没が早くなることから、計画的に作業を行うとともに、夕方以降に作業をする場合には、早めの点灯を心がけましょう。

◆農薬適正使用

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかりと確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後に、散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

全国的に、12月は農薬の事故・違反事例が増加する傾向にあります。県内においても、過去に残留農薬基準値を超過したケースがあるため、十分な注意が必要です。

特に、農薬ラベルの確認不足、隣接ほ場からの飛散、散布器具の洗浄不足が原因の事故・違反が多いため、細心の注意を払いましょう。

◆園芸ハウスの省エネ対策

施設園芸省エネルギー生産管理マニュアル及び施設園芸省エネルギー生産管理チェックシートを活用し、暖房器具の点検整備や省エネ設備の適切な運転管理を行い、省エネ対策の徹底を図りましょう。

（農業普及技術課）

内容の詳細について

12月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害一般	－	九州南部の1か月予報では、気温が高く、降水量が多い予想となっています。施設内が多湿になると病害の発生が助長されるため、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病	並 やや少 並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発生を確認したら初期防除を徹底します。
	黄化えそ病(MYSV) ミナミキイロアザミウマ	並 並	キュウリ黄化えそ病の発病株を確認した場合は直ちに抜き取り、適切に処分します。また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。
	タバココナジラミ※	やや多	タバココナジラミの発生が多くなっています。本虫は、キュウリ退緑黄化病を媒介するため、施設内で増殖しないよう防除を徹底します。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	－	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後に蒸し込みを行います。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 黒枯病	やや多 少 並	斑点病の発生が多くなっています。多湿条件で発生しやすいため、暖房、送風、換気等により、施設内の湿度を低く保ちます。また、罹病葉を発見したら直ちに除去し、ほ場外に持ち出し処分します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ※	並 多 やや多	ヒラズハナアザミウマの発生が多くなっています。多発してからでは防除効果が低くなるため、低密度のうちに防除を徹底します。 タバココナジラミの発生が多くなっています。黄色粘着板を設置し、早期発見、早期防除に努めます。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 うどんこ病	並 やや多 やや少	すすかび病の発生が多くなっています。すすかび病は多湿条件で発生しやすいため過繁茂にならないように管理を行うとともに、ハウスの換気を良くします。いずれの病害も病勢が進展してからでは防除効果が低くなるため、発病を確認したら早めに防除します。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) タバココナジラミ※	やや多 多	TYLCV および、媒介虫であるタバココナジラミ発生が多くなっています。タバココナジラミの早期発見に努め、低密度のうちに防除を行います。TYLCV の発病株を発見した場合は、必ず株全体を抜きビニル袋に入れて枯れるまで密閉するなどして、適切に処分します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	並 並	うどんこ病は、予防に重点をおくとともに、罹病した葉や果実は伝染源となるため速やかに除去します。 炭疽病を発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止します。
	ハダニ類 アブラムシ類 ヒラズハナアザミウマ	やや少 並 やや多	ハダニ類は寄生数が増加してから防除は難しくなるため、低密度時のうちに防除を徹底します。 ヒラズハナアザミウマの発生が多くなっています。花や果実に寄生し、食害により果実品質が低下するため、低密度での防除に努めます。
かんきつ類 (露地栽培)	ミカンハダニ	並	マシン油乳剤による防除は、薬剤感受性が低下した個体群に対しても効果が期待され、またカイガラムシ類との同時防除も可能です。樹勢が弱っている場合は、薬害を生じる恐れがあるので注意します。
茶	カンザワハダニ	やや多	発生密度が高いほ場では、次年産の減収、品質低下の原因となるため、マシン油乳剤等による防除を行います。

- 1) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 2) ※は病害虫発生予察注意報を発表中です。
- 3) 病害虫防除肥料検査センターの HP アドレスは、QR コードより閲覧してください。

